

舟由良港に到る（吉村寅太郎）

首を 回らせば 蒼茫たり 浪速の 城

篷窓 又 聴く 杜鵑の 声

丹心 一片 人 知るや 否や

家郷を 夢みず 帝郷を 夢む

回首蒼茫浪速城 篷窓又聴杜鵑聲

丹心一片人知否 不夢家郷夢帝郷

解説 寅太郎は寺田屋事件のあと捕えられ、捕えた薩摩藩は高知藩に引き渡した。高知藩は船牢に幽閉して土佐に護送。大阪を立ち、淡路島の由良に寄港した時、寅太郎は船中であつて憤悶に堪えずこの詩を作った。

語訳 ※由良港Ⅱ淡路島の東岸にある港。※蒼茫Ⅱぼんやりとしてはるかなさま。※浪速城Ⅱ大阪の町。※篷窓Ⅱとまをかけた舟のまど。※杜鵑Ⅱほととぎす。※帝郷Ⅱ天子のみやこ。京都。

通釈 船は淡路の由良の港に着いた。首を回らして、振り返れば、船出したあの大坂の町も遙かに遠く、ぼんやりと霞んではつきりは見えない。おもえば、事破れ、無念にも故郷へ護送される身となった。粗末な舟の窓で血を吐くような杜鵑の声を聞く私の心は重く苦しい。今の世にだれがこの胸中の一片の真心を知ってくれようか。この船中で見る夢は故郷のことなどではなくして、天皇のおられる京の都のことである。こうした気持はわかるものではない。